

多文化におけるノイズとボイスの混交

——生涯学習におけるストーリー／ナラティブと視座の変容——

Mix of Noise and Voice on Multi-culture

——Stoty/Narrative on Self-directed Life-long Learning and Transformation of Perspective——

矢野 泉

Izumi YANO

1. はじめに

就業や国際結婚等により渡日し、定住したフィリピン系移民のなかには、親族を呼び寄せ、家族の再統合を果たし、子どもの教育に支援者と共に取り組んでいる人々がいる。なかには、フィリピンと日本、あるいは日本以外の諸国を往還しながら、再統合を繰り返す家族もいる。まず、親世代が渡日し、生活の基盤ができたところで、フィリピンの親族にあずけていた子どもを呼び寄せて、親元で育てる。先人いわく、「10年ひと昔」といい、10才に達した子どもは、言語や生活習慣の原型が出来るという説もある。先人の故事にならい、親世代を移民第1世代、10才を超えた子ども移民を出身文化圏のルーツをもつ移民第1.5世代1)とする。

移民第1.5世代への着眼が新たになされた2)ように、フィリピン系移民は一枚岩の集団として説明できないし、フィリピン系移民の文化や労働、教育に関する研究は多様な視座からなされている。フィリピン系移民は、親族や出身地域、移民先で属する社会階層、移民先で抱える問題関心等によって、つながりをつくっている。そうしたつながりは、移民の文化圏における差異が混ざっているようで混ざっていない、すなわち、多様性があり固有性がある。フィリピンの文化圏が成立したプロセスに、フィリピン最大の島、ルソン島をはじめとするフィリピン諸島の諸地域における先住民と交易を通じて定住した移民の通婚があった。基層文化に新たな文化が加えられるというプロセスが繰り返された。

筆者はフィリピン系移民の教育や文化に関する研究者としては初学者である。日本における移民のなかにフィリピンからの子ども移民がいることには関心を持っていた。親から呼び寄せられたり、日本生まれでフィリピン文化圏育ちであったりする、子ども移民と、学校でだされた宿題を題材に学んだり遊んだりした経験があったり、子供たちが高校や大学に進学する助けとなる奨学金基金に参加している。しかし、研究対象としてフィリピンから呼び寄せた子ども移民に焦点をあてたということは、あまりなかった3)。

フィリピン諸島のフィールドワークをしたり、在日フィリピン人コミュニティの緻密な調査研究が思うようにできなかった状況にあって、筆者は博物館でモノと人をつなぐ(キュレイトする)学芸員と出会い、インタビューを経た。筆者は、トランスクリプトにおけるノイズとボイス、及び、語り／ナラティブによって、自己の殻が破られ、自己が誰かへと更新されていく語り／ナラティブの学びに関する知見を明らかにしたい。キュレイトする学芸員すなわちキュレーターとの出会い、トランスクリプトの対照、聴くだけでなく、書き起こしを追体験し繰り返し読むことで可能となるナラティブの学びに言及することによって、本研究における知見を示す。なお、社会構成主義心理学のナラティブ・アプローチが援用された、教師教育論やカリキュラム論における「NIといわれるナラティブ探究」(二宮,2010:37-50)は、教師／子どもの行為を解釈するカリキュラム論や教師教育論、学校型教育の教育実践論を含意するが、本稿で知見として示す語り／ナラティブの学びは、カリキュラム論や教師教育論など、学校型教育における行為の解釈を主

眼とせず、モノ／人のキュレーションを照射し、モノから人へ人から社会に至る、知識の基盤となる視座の変容を含意しているの、従来の「NIといわれるナラティブ探究」のオルタナティブとして一線を画す知見であることを確認しておく。よって、本稿では、ナラティブ探究及びライフストーリー研究における語りの区別立てが研究方法論の議論の途上にあり、いまのところ明確な区別ができないものと考え、語りとナラティブとをあわせて、語り／ナラティブと表記した。

2. キュレーターとの出会い

フィリピン系移民の教育や労働、文化に関する研究を専門に行う先達たちの学績に圧倒され、四苦八苦を味わった3年目の夏、考古学の視座からフィリピンの文化に関する企画展を手がけた学芸員と出会った。学芸員の仕事は、モノが学芸員に媒介されて語る知を、来館者がモノを見たり触れたりすることにより、モノが示す知識を来館者につなぐ仕事である。つなぐという役割において、学芸員はキュレーターである。モノから示された知識と接続され、来館者は学びの世界に跳躍する。モノを通じて学ぶことのできる博物館や資料館は、生涯学習施設である。生涯学習はだれかに強いられて行うのではなく、関心があるから学びにいたる。本稿では、関心があるということを楽しいことに通ずると考究する。ただし、楽しいことに通ずるといことは楽しいだけであるということとは異なる。楽しさに耐え、モノから示された知識と接続されることは、無知を明るみに出し、無知の知を掘り下げていくことでもあるから苦しいことでもある。

キュレーターであるBは、横浜ユーラシア文化館という博物館で学芸員として働いている。筆者の職場と住まいのある横浜で、フィリピンの文化や歴史を学べる博物館はないだろうかとインターネット検索をしていたとき、筆者は「フィリピンの文化と交易の時代——ハロハロで Good!(ゲー!)」展が開催中であることを知った。「ハロハロ夏祭り!フィリピンハロハロフェスタ」という企画があることもわかり、「これはどうしても足を運びたい」そして「こんなに楽しそうな企画展を組んだ学芸員に会ってみたい」と関心が高まった。そこで、横浜ユーラシア文化館に連絡し、展示を説明して下さるというアポイントメントを取り付けた。その結果、会う前にひとりで企画展を味わい、その上で会って、解説を聴講しながら企画展をまわった。そのうち、Bもまたフィリピンの歴史や文化についての初学者であることを知り、初学者でありながら、さまざまな人々の協力を活かし、企画展をやり遂げたパワーに魅了された。よって、企画展終了後半年を経て、半構造的インタビューをBの協力で行うこととなった。もっとも、常設展示のほかに、企画展示を行う、モノとひとをキュレートする学芸員は、企画展のたびに初学者としてさまざまなモノに取り組み、モノから示された知識を把握し、その知識を来館者が接触できるような展示や、図録／解説書を作成、広告、フェスタや講座の人材／情報収集まで行う。これだけ広範囲の仕事をこなすことができるのは、学芸員には知的活動の基盤となる専門性があるからである。前述した通り、Bは考古学が専門である。Bが発案した企画の「ハロハロで Good!(ゲー!)」の「ハロ」は、日本語・英語・フィリピン語ポケット辞典によれば、〈混ぜる :to mix:maghalo/ihalo〉である。かき氷にフルーツや豆、プリン、アイスクリームをトッピングしてから、混ぜ混ぜして食べるフィリピン原産デザートに「ハロハロ」がある。

3. トランスクリプトの対照

語りの記録(トランスクリプト)はインタビュアー自ら書き起こすことが基本である。「トランスクリプト作成の大原則は、できるだけ調査者自身が書きおこしをすることと、語り手と聞き手を含む過程を逐語おこしすることである。やむを得ず、トランスクリプト作成を調査者自身ではなく他の研究者や書き起こしの専門家に依頼する場合でも、かならず自ら再チェックする必要がある。他者による書き起こし、特有な方言や専門語などの調査者でないとうからない場の状況などについてまちがいが少なくないばかりか、担当者が自らの判断で一部分を省略したり、語り手の言い回しをわかりやすく変更したりしていることがありうるからである。」(桜井・小林編,2005:133-134)

研究書にも書かれているとおり、トランスクリプト作成には原則がある。しかし、書き起こしの専門家に依頼することもやむを得ない場合として許されている。今回は書き起こしの専門家に依頼し、トランスクリプトの再チェックをした。4) テープの音が聞き取りにくかったせいか、聞き取れない音として「●」、「●聞き取り不能」という表現が使われている。ICレコーダーでも録音していたので、再チェックのために、両方の録音で検証した。「= =」は、「こう聞こえたがあやふやなので検討してほしい」という記録の記号である。「まちがい」や「省略」、「変更」について検証することはあったが、今回のトランスクリプション（書き起こし）では、鮮やかな「省略」や「変更」が散見されたので、他者によるトランスクリプトとインタビュアーによるトランスクリプトを対照させ、なぜ「まちがい」、「省略」や「変更」が起きるのか考察した。考察の結果を先取りして述べる。録音された「音」として読み取るのであれば、「まちがい」や「省略」や「変更」があってもおかしくない。「これらの音をこういう言葉として聞き取ったのは、担当者がこういう言語群を持っているからだろう」であるとか、この担当者に依頼されるトランスクリプトは学術分野のものではないだろう」とか、幾通りかの推理が成り立つ。他者によるトランスクリプトとインタビュアーによるトランスクリプトを対照させ、何度も読み返してみると、読み取られた「音」がそのように聞こえなくはない。インタビューのトランスクリプトを語りとしてみると、意味を持つ「物語世界」と、「物語世界」として成立させる「ストーリー領域」によって構成される。5) 他者によるトランスクリプトには「ストーリー領域」がうまく機能してない、よって、「まちがい」、「省略」や「変更」のある、意味が通らないトランスクリプトになるのである。

以下に示した〈場面〉1から5をみると、「他者によるトランスクリプト」におけるノイズとボイスの混交が興味深い。解釈を複数持つフレーズの多様性をノイズ、ひとつの意味にまとまるフレーズの固有性をボイスととらえる。

〈場面1〉

(他者によるトランスクリプト)

A：えー、では。まず一点目として、あの、えーとね、もう既に伺ったような気もするんですが、あの、企画することになったきっかけを、あの、コンパクトにお教え願えたらいいんですけど。

B：もともとは、あの、平成20年度に、あの、フィリピンの考古学を研究している研究者の方、あの、横浜にお住まいなんですけど、その方から、あの、考古学の人が行ったときに、こう、いろいろな民族資料を集めてらした、その寄贈を受けたんですね。今度はその紹介ということのつもりで企画してやりました。この方がですね、私が大学のときに教わったことがある先生で、あの、ですので、まあ、私自身は全くフィリピンを知らない人間なんですけど。あの、まあ、フィリピン考古学をやっている先生がいるってことを知ってほしいということなんですけども。それと東南アジア考古学の■ガイセキ■みたいなのをした人もいますので、まあ、その先生に教わりながらやれることをやろうかなと思ったのが、始まりです。

A：どんなことを教わったんですか。その考古学、フィリピン考古学の先生からは。

B：ほとんどは、今はちょっと古いかたちになっちゃっているかもしれないんですけども、日本既存文化に南の南方系の文化があるわけなんですけども、それが、その、黒潮の流れに乗って、こう、やってきたと。その、黒潮の流れに乗った人と交易をして、ほんと、あの、交易の時代とか、こういう時代でみると●の時代ですけども。黒潮の流れに乗って南の文化がやってくると、海流の、こう、曲がり角の、この角っこにフィリピン諸島があるんですよ。なので、まあ、交易の時代という、これは、まあ、スペインなんかが入ってくるちょっと前ぐらいの、フィリピンが、あの、すごく華やかな時代です。それよりもっと前から、いろいろな文化の、こう、流出経路に当たっているということを学んでいったので。まあ、こういった■カタチ■での、とくにカタチについてはここに写真が。

(インタビューによるトランスクリプト)

A：えー、では。まず一点目として、あの、えーとね、もう既に伺ったような気もするんですが、あの、企画することになったきっかけを、あの、コンパクトにお教え願えたらいいんですけど。

B：もともとは、あの、平成20年度に、あの、フィリピンの考古学を研究している研究者の方、あの、横浜にお住まいなんですけど、その方から、あの、考古学の人が行ったときに、こう、いろいろな民族資料を集めてらした、その寄贈を受けたんですね（考古学者青柳洋治氏のコレクション平成20年度寄贈）。今度はその紹介ということのつもりで企画してやりました。この方がですね、私が大学のときに教わったことがある先生で、あの、ですので、まあ、私自身は全くフィリピンを知らない人間なんですけど。あの、まあ、フィリピン考古学をやっている先生がいるってことを知ってほしいということなんですけども。それと東南アジア考古学の概説を聴いたことがありますので、まあ、その先生に教わりながらやれることをやろうかなと思ったのが、始まりです。

A：どんなことを教わったんですか。その考古学、フィリピン考古学の先生からは。

B：当時は、今はちょっと古い説になっちゃっているかもしれないんですけども、日本の基層文化に南の南方系の文化があるわけなんですけども、それが、その、黒潮の流れに乗って、こう、やってきたと。その、黒潮の流れに乗った人と交易をして、ほんと、あの、交易の時代とか、こういう時代でみると、交易よりもずっと前の時代ですけれども。黒潮の流れに乗って南の文化がやってくると、海流の、こう、曲がり角の、この角っこにフィリピン諸島があるんですよ。なので、まあ、交易の時代という、これは、まあ、スペインなんかが入ってくるちょっと前ぐらいの、フィリピンが、あの、すごく華やかだった時代です。それよりもっともっと前から、いろいろな文化の、こう、流出経路に当たっているということを学んできたので。まあ、こういった話の、古い話については少し知識があったということです。

「概説」を「ガイセキ」と反訳したのは、考古学に関する言葉がすでに反訳されていたため、考古学において調査研究されるモノ、ここでは岩石のような石だと解釈されたのではないだろうか。また、「話」を「カタチ」と反訳したのは、同じ理由による。録音機に残された音をいくら聴いても、「とくにカタチについてはここに写真が」というフレーズは聴かれない。トランスクリプションを行った担当者が自らに対してわかりやすく記録を整理するために、語り／ナラティブの「変更」をした。

<場面2>

(他者によるトランスクリプト)

B：はい。当初、先生からいただいたものというのは割と北のほうに限られたものだった、あの、展示しても、あの、ちょっと●のような、ハロハロという、割と、あの、限られた地域のものだったので。

A：ルソン島の北のほうと。

B：そうです。多かったですね。

A：うん。

B：ルソン島の北の、要は●族っていうのと、あと、少し、あの、●をわった人がありまして、それは、あの、やっぱり先生が、こういう、フィリピンの中でも特殊な、特殊というか少ない。

A：少数の。

B：はい。そういうところに目を注いだという結果なんですけど。全体の部分が、それをたどった仕事だったんですね。

A：ああ。

B：それで、ちょっと、いろいろ計画しているときに、フィリピンの人に喜んでもらえるような構図にもしたいし、フィリピン全体を、あの、もうちょっと見つめるような構図にしていけないとい

うのと、まあ、こういういろんな周辺の事情があって、まあ、今年の企画では少し大きめのかたちになっていったということがあります。

A：「フィリピンの文化と交易の時代」というタイトルを決めたのは、やっぱり、その起案書をお書きになるんでしょうから。

B：はい。

A：そこで、もう、できあがっていた。この、「フィリピンの文化と交易の時代」という●は。

B：そうです。あの、内容的にこうなるだろうというのがちょっとあったのと、それから、●のタイトルがですね、この、「ハロハロで good (ゲー)！」っていうのが一番最初にできちゃったので。

A：一番に最初にできたんですか。

B：これは。

A：●で考えたんでなくて。

B：ちょうど、この、いろいろ企画書を出し始めたころ、まあ、この、館全体がなんか今大変な状況だと、ちょっと前ぐらいですけど、まあ、堅いことをやるなっていうことはいろんなほうから言われているので、だったら思いっきり弾けた案を出してみようかと思って。

A：うん。

B：で、ハロハロって言葉は、あの、使おうと思ったので、フィリピンのことをちょっと学び始めてすぐに知った言葉なので。

A：ハロハロでハリハリって言われるんですよ。

B：なんか楽しい言葉っていう思いからこれは使おうと思って、じゃあ、ハロハロでいくのだと言って。以来、もう、●にかえて。会議で私は、あの、ハロハロもいいけど。

A：good っていうのはちょっとねっていう。

B：だいぶ言われたんですね。で、なので、あの、これ、こっちが●、「フィリピンの文化と交易の時代」っていうのが最終的にメインに決まって。

A：堅苦しいほう。

B：はい。で、「ハロハロで good (ゲー)！」って、これ小さく入れるような書類になっていたんですけど。

A：うん。

B：あの、これは、その書類持って、ポスターのデザイナーさんに見せたら、これぐらいできたんです。

A：やっぱり。

B：ガーッと●。

A：ああ。

B：なので、ここまでできちゃったら、もうこのまま行こうというような感じですね。

(インタビュアーによるトランスクリプト)

B：はい。当初、先生からいただいたものというのは、あの、展示室もとくに3階の展示室の方が、割と、あの、限られた地域のものであったので。

A：ルソン島の北の方と。

B：そうです。多かったですね。

A：うん。

B：ルソン島の北の、山岳民族といわれている人たちのと、モスリムの人たちもありまして、それは、あの、やっぱり先生が、こういう、フィリピンの中でもモスリムの人たちは少ないので。

A：少数の。

B：はい。そういうところに目を注いだという結果であって、フィリピン全体を見るには非常に偏った資

料だったんですね。

A：ああ。

B：それで、ちょっと、いろいろ計画していくうちに、フィリピンの人に喜んでもらえるような展示にもしたいし、フィリピン全体を、あの、もうちょっと見えるような展示にしていけないなというのと、まあ、こういういろんな周辺の事情があって、まあ、今年の企画では少し大きめのかたちになったというのがあのときの流れです。

A：「フィリピンの文化と交易の時代」というタイトルを決めたのは、やっぱり、その起案書をお書きになるんでしょうから。

B：はい。

A：そこで、もう、できあがっていた。この、「フィリピンの文化と交易の時代」ということについては。

B：そうです。あの、内容的にそうなるだろうというのがちょっとあったのと、それから、展示のタイトルがですね、この、「ハロハロで Good (ゲー)！」っていうのが、実は、一番最初にできちゃったので。

A：一番に最初にできたんですか。

B：これは。みんなで考えたんでなくて。

B：ちょうど、この、いろいろ企画書を出し始めたころ、まあ、堅いことをやるなっていうことはいろんなほうから言われているので、だったら思いっきり弾けた案を出してみようかと思って。

A：ふむ。

B：で、ハロハロって言葉は、あの、使おうと思ったので、フィリピンのことをちょっと学び始めてすぐに知った言葉なので。

A：ハロハロでサリサリって言われるんですよ。

B：なんか楽しい言葉っていう思いからこれは使おうと思って、じゃあ、ハロハロでいくんだと言って。以来、もう、最初にかえて。会議で。私。あの、ハロハロはいいけど、ちょっとね、というのがあって。

A：Good (ゲー)！っていうのはちょっとねっていう。

B：だいたい言われたんですね。で、なので、あの、これ、こっちがサブになったんですよ。「フィリピンの文化と交易の時代」っていうのが最終的にメインに決まって。

A：堅苦しい方。

B：はい。で、「ハロハロで Good (ゲー)！」って、これ小さく入れるような書類になったんですけど。

A：ふむ。

B：あの、これは、その書類持って、ポスターのデザイナーさんに見せたら、これが出てきたんです。そこまでいったら、このままいこうという感じですね。

「B：あの、これは、その書類持って、ポスターのデザイナーさんに見せたら、これぐらいできたんです。A：やっぱり。B：ガーッと●。A：ああ。B：なので、ここまできちゃったら、もうこのまま行こうという感じですね」と「B：あの、これは、その書類持って、ポスターのデザイナーさんに見せたら、これが出てきたんです。そこまでいったら、このままいこうという感じですね」との対照において、注目したいのは、「A：やっぱり。B：ガーッと●。A：ああ」である。これはこういう音に似たノイズとしてカセットテープに録音されていた。「省略」や「変更」というより、〈聴き取り不能〉と表記してもよい箇所である。

<場面3>

(他者によるトランスクリプト)

B：ハロハロってどういうイメージがあるんだとか、まあ、いろいろ聞いてはみたんですけども、まあ、そういう中で、あの、もしかしたら、いろんな文化が混ざり合っていることを、自分たちで気持ちよく思っ

ていない人たちも、思わないような考え方も出てくるんじゃないかと、●思ったので。でも、いろいろ勉強して、混ざっているところがフィリピンの元じゃないかと思ったんですよ。それで。

A：それは、その、フィリピンの方々から出てきた言葉だったんですか。

B：いや、私がおのように勝手に思ったんです。

A：ああ、そうですか。

B：それで、あの、何ていうか、いろんなものが混ざり合って、しかもフィリピンという国が第一にたてられた。

A：はい。

B：そういう国にあって、でも、そこで、●掛け合わせて、例えその混ざったものを相殺したときに一つのフィリピンという世界になったんじゃないかと。それって素敵なことじゃないかと思って。その、ただハロハロっていうだけで、ハロハロが無なんだよっていうことを。どこまで●きているか分かんないんですけど。

A：ああ、なるほど。

B：この話をして、また英語の得意な上司がこの英語のタイトルを付けてくださったときに、この比較にする。

A：「The Philippines, Diversity and Uniqueness」。

B：そう。Diverse というと、まあ、多様性ですよ。

A：はい。

B：Unique ですが、固有性ですよ。

A：はい。

B：で、この多様性こそがあなたたちの Uniqueness だよっていうことまでが英語で、それもそれが good なんだって付けているところが日本語だと。

A：ああ。日本語。

B：これでさらに、あの、なんか評価を付けたというか。

A：ああ。なるほど。Diversity and Uniqueness っていうと、何ていうか、あの、なかなかいい表現なので。多様性の。

B：はい。

A：うーん。

B：連続するほうが、やっぱり●、「ハロハロで good」って、そういうことを考えているんですよと言ったら、まあ、●。

A：そうか。「ハロハロで good」は日本語でもんね。

B：そうです。

A：だから、外国人は、「The Philippines, Diversity and Uniqueness」のほうが分かります。

B：もっとこっちだと格好いいんですけどね。日本語だと分からないとか、ふざけてるのかという感じも。

A：ああ。日本語なら通じるけど。

B：はい。

A：あの、英語にならない。なんか、HALO-HALO is good というのは、ちょっと変な英語。そんなに最初から「ハロハロで good (ゲー)！」っていうテーマが、あの、最初に出てきたとは思わなかったです。あの、意外なので。最初から堅いのを付けるのかと思ったら違ったんですね。それは、やっぱり、あの、来館者を増やさなきゃいけないってことを考えて、楽しいものにしようという。

B：それはありました。それと、まあ、あの、●として初めから、何かとてつもなく、あの、弾けた要素がいっぱいぐらいだっただけよかったなと思いますね。だいたい、あの、堅い、堅いと言われてるので、じゃ

あ、ちょっとそういう気持ちもあったので。そしたら、あの、■サイン■では駄目だったけど、●では終わりのほうが●になってきたから。

(インタビュアーによるトランスクリプト)

B：ハロハロってどういうふうな印象があるのか、いろいろ聞いてはみたんですけども、まあ、そういう中で、あの、もしかしたら、いろんな文化が混ざり合っていることを、自分たちで気持ちよく思っていない人たちも、思わないような考え方も出てくるんじゃないかと、最初の頃思ったんですよ。でも、いろいろ勉強して、混ざっているところがフィリピンの魅力じゃないかと思ったんですよ。それで。

A：それは、その、フィリピンの方々から出てきた言葉だったんですか。

B：いや、私がおのように勝手に思ったんです。

A：ああ、そうですか。

B：それで、あの、何ていうか、いろんなものが混ざり合って、しかもフィリピンというくくりそのものが外国人につくられた。

A：はい。

B：そういう国にあって、でも、それで何百年か経って、それを総体として一つのフィリピンという世界になったんじゃないかと。それって素敵なことじゃないかと思って。その、ただハロハロっていうだけで、ハロハロが Good (グー!) なんだよっていうことを入れてみたんですね。うまく説明できないんですけど。

A：ああ、なるほど。

B：この話をして、また英語の得意な上司がこの英語のタイトルを付けてくださったんですけど。

A：「The Philippines, Diversity and Uniqueness」。

B：そうなんです。Diverse というと、まあ、多様性ですよ。

A：はい。

B：Unique ですが、固有性ですよ。

A：はい。

B：で、この多様性こそがあなたたちの Uniqueness だよっていうことまでが英語で、それもそれが Good! (グー!) なんだって付けているところが日本語だと。

A：ああ。日本語。

B：これでさらに、あの、なんか評価を付けたというか。

A：ああ。なるほど。Diversity and Uniqueness っていうと、何ていうか、あの、なかなかいい表現だって。

B：はい。

A：うーん。

B：それでこういうタイトルを付けてくれたんですが。

A：そうか。「ハロハロで Good!(グー!)」は日本語ですもんね。

B：あ、そうです。

A：だから、外国人は、「The Philippines, Diversity and Uniqueness」のほうが分かる。

B：こっちだと格好いいんですけどね。日本語だと分からないとか、ふざけているのかという感じも。

A：ああ。日本語なら通じるけど。

B：はい。

A：あの、英語にならない。なんか、HALO-HALO is Good! というのは、ちょっと変な英語。そんなに最初から「ハロハロで Good! (グー)！」っていうテーマが、あの、最初に出てきたとは思わなかったです。あの、意外な感じで。最初から堅いの(企画展の名称)を付けるのかと思ったら違ったんですね。それは、やっぱり、あの、来館者を増やさなきゃいけないってことを考えて、楽しいものにしようという？

B：それはありました。それと、まあ、あの、会議の席で、とてつもなく、あの、弾けた要素を一回ぐら
い出してみようと思ひまして。毎日、あの、堅い、堅いと言われてるので、じゃあ、ちょっとそういう気
持ちもあったので。そしたら、あの、会議では駄目だったけど、むしろ周りのほうが面白がってくれたから。

モスリムという言葉はパソコンで変換しても「もスリム」と表示されるだけで、イスラム教徒を意味す
る「モスリム」には変換されない。したがって、インタビューの当事者には予想のできないフレーズに「変
更」されたのだ。「構図」という語が繰り返し反訳されたことも気がかりである。「構図」は「展示」が「変
更」された反訳だが、展示という語はそれほど聞き慣れない言葉なのだろうか。博物館にめったに行かな
い人であれば、展示という言葉は非日常的な語であるため、音が言葉につながらないことも考えられる。
それから、「会議」から「サイン」へ「変更」された反訳については、音がひろえておらず、そもそも〈聞
き取り不能〉だったのである。

<場面4>

(他者によるトランスクリプト)

A：ああ、やっぱりそうなのか。ふーん。なるほど。それで、あの、まあ、じゃあ、ハロハロのほうで、
質問を続けさせていただくんですけど。あの、フィリピンには、まあ、複数の文化圏があるというのは、
ねえ、多言語だし、この、こういう衣装とか、こういう道具とか見ても、ちょっとずつ違ったり、だいぶ
違ったりしますよね。

B：はい。

A：で、その、で、その文化圏、ある文化圏は、ほかの文化圏から影響を受けて、その、違う文化圏なん
だけれども、つまり、あれですよ、Diversity で Uniqueness なんですよ。違う文化圏なんだけれ
ども、その、あの、違う文化圏、異なる文化圏の中にも共通点があるんだということで、あの、うんと、
ハロハロっていうふうな意味なのか。

それとも、あの、何ていうか、つまりこれ、フィリピンの、あの、ハロハロっていう食べ物にも掛けてい
るんだけど、いろんな、こう、つまりこう、かき氷の中にいろんなものを入れるわけですよ。で、それ
は全然違うものを入れて。で、どうやって食べるのかと思ったのは、あの、ぐちゃぐちゃに混ぜて、あの、
何て言うんだらう、何食べたいのか分かんない、全然違うものをつくる感じで食べるのか、それとも、あ
の、それぞれの、あの、うんと、トッピングをそのまま食べながら、あの、口の中で混ぜるのを楽しんで
食べるのか。どっちの流儀なんだろうって。

B：あの、恥ずかしながら、実際に食べたことがないので、あの、申し上げにくいんですけど、あの、知
識だけなんですよ。混ぜる、●は食べるんですよ。

A：ぐちゃぐちゃに。

B：そのぐちゃぐちゃがですね、混ぜていっぺんに、この、ぐちゃぐちゃにかたまりになるような混ぜ方
ではなく。

A：ふーむ。

B：だから、あの、やっぱり、食べて、食べればいろんな味がやってくる。

A：ふーむ。

B：という感じで。あの、全く違う一味にしたようなものではなくて、一口目はさっきのフルーツの味が
して、二口目は別の味がした、そういうふうな。

A：ふーむ。

B：かき氷がこうあって、あの、フルーツとか、なんかいろいろ入っている。それが、あの、こおりまみ
れのフルーツだったり、あんこが来たり、お豆が来たりするっていう。

A：ふーむ。

B：フルーツにいろんな味が加味したようなというふうに思っていたら。

A：次々にいろんな味を楽しんで食べるってということなんですね。じゃあ、ぐちゃぐちゃに混ぜるっていう、ぐちゃぐちゃっていうか、こう、あの、一つ一つの味が分からないくらい違う味をつくって食べるっていうんじゃないくて、フルーツの味を生かして、あの、違いを楽しんで食べる。■何食べる■。

B：そうなんです。

(インタビュアーによるトランスクリプト)

A：ああ、やっぱりそうなのか。ふーむ。なるほど。それで、あの、まあ、じゃあ、ハロハロのほうで、質問を続けさせていただくんですけど。あの、フィリピンには、まあ、複数の文化圏があるというのは、ねえ、多言語だし、この、こういう衣装とか、こういう道具とか見ても、ちょっとずつ違ったり、だいぶ違ったりしますよね。

B：はい。

A：で、その、で、その文化圏、ある文化圏は、ほかの文化圏から影響を受けて、その、違う文化圏なんだけれども、つまり、あれですよ、Diversity で Uniqueness なんですよ。違う文化圏なんだけれども、その、あの、違う文化圏、異なる文化圏の中にも共通点があるんだということで、あの、うんと、ハロハロっていうふうな意味なのか。

それとも、あの、何ていうか、つまりこれ、フィリピンの、あの、ハロハロっていう食べ物にも掛けているんだけど、いろんな、こう、つまりこう、かき氷の中にいろんなものを入れるわけですよ。で、それは全然違うものを入れて。で、どうやって食べるのかと思ったのは、あの、ぐちゃぐちゃに混ぜて、あの、何て言うんだろう、何食べたいのか分かんない、全然違うものをつくる感じで食べるのか、それとも、あの、それぞれの、あの、うんと、トッピングをそのまま食べながら、あの、口の中で混ぜるのを楽しんで食べるのか。どっちの流儀なんだろうって。

B：あの、恥ずかしながら、実際に食べたことがないので、あの、申し上げにくいんですけど、あの、知識だけなんですけれどもね。混ぜる、混ぜては食べるんですよ。

A：ぐちゃぐちゃに。

B：そのぐちゃぐちゃがですね、混ぜていっぺんに、この、ぐちゃぐちゃにかたまりになるような混ぜ方ではなく。

A：ふーむ。

B：だから、あの、やっぱり、食べて、食べればいろんな味がやってくる。

A：ふーむ。

B：という感じで。あの、全く違う一味にしたようなものではなくて、一口目はさっきのフルーツの味がして、二口目は別の味がした、そういうふうに。

A：ふーむ。

B：かき氷がこうあって、あの、フルーツとか、あんことか、いろいろ入っている。それが、あの、氷まみれのフルーツだったり、あんこが来たり、お豆が来たりするっていう。

A：ふーむ。

B：フルーツにいろんな味が来たというふうに思っていたら。

A：次々にいろんな味を楽しんで食べるってということなんですね。じゃあ、ぐちゃぐちゃに混ぜるっていう、ぐちゃぐちゃっていうか、こう、あの、一つ一つの味が分からないくらい違う味をつくって食べるっていうんじゃないくて、それぞれの味を生かして、あの、違いを楽しんで食べる、ていうみたいに食べる。

A：なるほど。

B: そうなんです。

「あいづち」をいかにトランスクリプションするか。これは見過ごしがたい問題である。「ふーん」と書き起こしすると、インタビューイーの語りをやり過ごすようにも解釈できる。しかし、このような解釈はインタビュアーの本意ではない。「ん」を「む」と書き起こすことで、「なるほど、そうなのか、そういうことなのか」というインタビュアーの関心の深さを示すことができる。

<場面5>

(他者によるトランスクリプト)

B. あの、私は、あの、もともとの島との交易の時代、華やかな時代のあとは、ほんとに●歴史ばかりがあるんですけど。まあ、その中に、その、やっぱり●諸国の●とか、それが日本に通じて●したし、アメリカもやってきて、とりあえず島へやってくる中で、やっぱり、その●<聞き取り不能>、●に囲まれても、その中で、あの、もう一つ生活に生かしながらの導入というふうにとまって、それぞれの●ような、あの、ある国は●ですね。だから、まあ、あの、外からの思惑であれ、まあ、こっち側から思ったことであれ、一色になろうとか、一色にしようとかならないで、今まできているように思うんですよ。

A. うん。

B. で、ならないで今まできているようであれながら、受け入れるものは受け入れて、なんかその、あの、もともとのマレー系の色が見えたかと思えば、あとから入ってきたスペインの色が見えたかと思えば、あの、●が見えたかと思えば、最近のアメリカの色が見えたり、いろいろなので。あの、残すとこ残して、あの、受け入れるとこ受け入れて、でも、なんかこう、それぞれのかたちが全然違うものに変容したんじゃなく、いろんなものが、こう、外壁にこうくっついて、でも、おるんとかうやってみたら、やっぱりフィリピンの存在があるっていう。なんか、そこがうまく言えないんですが、すごく不思議だし。●に乗っていたというのを知らないの。

A. ああ。

B. 初めて会った世界で、面白い。あの、ほんとに、それは歴史の結果なんですけれども。でも、今となつては、これは非常に独特なところなんじゃないかと。それも、その、ハロハロが、ハロハロっていうのが結構つらい歴史の結果なんだけど、でも、そこでできあがった今のフィリピン●が私みたいな感じで。あの、みんなも好きになりませんかという感じなんです。あの、●っていう。

(インタビュアーによるトランスクリプト)

B. あの、私は、あの、もともとの島との交易の時代、華やかな時代のあとは、ほんとに歴史ばかりがあるんですけど。まあ、その中に、その、やっぱり、ひたすら、ひどい目に遭う。キリスト教国に染めようとか、日本は日本でそういうこと〈ひどいこと〉もやりましたし、アメリカもとりあえず統治して島へやってくる中で、個っていうのがほんとにきちんと残っている。ゆるーいまとまりの中で、それぞれの個がきっちりまとまって残っているぞ、というのが。だから、まあ、あの、外からの圧力であれ、まあ、こっち側から思ったことであれ、一色にしようとかならないで、今まで来ているように思うんですよ。

A. ふむ。

B. で、ならないで今まできているようであれながら、受け入れるものは受け入れて、なんかその、あの、もともとのマレー系の色が見えたかと思えば、あとから入ってきた中国の色が見えたと思えば、スペインの色が見えたかと思えば、最近のアメリカの色が見えたり、いろいろなので。あの、残すとこ残して、あの、受け入れるとこ受け入れて、でも、なんかこう、それぞれのかたちが全然違うものに変容したんじゃなく、いろんなものが、こう、モザイク的にこうくっついて、でも、離れてこうやって見てみたら、やっ

ぱりフィリピンの存在があるっていう。なんか、そこがうまく言えないんですが、すごく不思議だし。そういう状態の世界というのは（他に）知らないの、はじめて会った世界なので。それが。

A. ああ。

B. 面白い。あの、ほんとに、それはつらい歴史の結果なんですけれども。でも、今となつては、それはとても魅力的なことなんじゃないかと。それも、その、ハロハロが、ハロハロっていうのが結構つらい歴史の結果なんだけど、でも、そこでできあがった今のフィリピンが好きかな私みたいなのがあって。あの、みんなも好きになりませんかかっていう感じなんですよね。で、「ハロハロで Good!」ていっているんですけども。

この場面では、全体的に〈聞き取り不能〉だった。依頼したテープを聴き直してみたが、音が不鮮明であり、まれに鮮明に聞き取れた音のつながりだけがフレーズとして反訳された。「いろんなものが、こう、外壁にこうくっ付いて、でも、ぶるんとかうやってみたら、やっぱりフィリピンの存在があるっていう」は「変更」された反訳である。ICレコーダーで聴き直したところ、「いろんなものが、こう、モザイク的にこうくっ付いて、でも、離れてこうやってみたら、やっぱりフィリピンの存在があるっていう」という語りであることがわかった。「ぶるんとかうやってみたら」という反訳はどのように生まれたのだろうか。ここもやはり音が鮮明に聞き取れなかったため「変更」された。「ぶるん」というのは、食感を表す語である。この担当者は「かき氷にいろいろなものを入れる」「ハロハロ」の食感を想像して反訳といってよい。

以上、〈場面〉1から5において示した通り、語り手と聞き手の会話のトランスクリプトをそのまま論文にとり入れる研究方法は、ライフストーリー・インタビュー研究において承認されている。「語り手の発話を尊重し、より語りを活かした」（桜井・小林：230）形式である。この形式をとると、会話を通じて語り／ナラティヴがどのように生成されていったかをたどることが出来る（桜井，2005）。つぎの章では、語り／ナラティヴが原動力となる主体的な学びについて述べる。

4. 語り／ナラティヴの学び

「初めはもう、とりあえず寄贈を受けたから、展覧会をしようと2、3年前に話だけはしまして。そのときはまだ、『ハロハロで Good!(グー!)] はないんですけど、フィリピンの民族資料を中心にした展示をしますよというのを何人かが取りざたしまして、そろそろ、『今年度のこのあたりですね』みたいな話が回ってきて」(インタビューアーによるトランスクリプト：15) 寄贈されたモノの細部の知識を考古学の見識を活かして深めるほど、「全然行ったことのないところの展示はできないと思って」(同前) Bは考古学の資料を寄贈した先生の紹介で、フィリピンナショナルミュージアムのスタッフを訪問し、寄贈されたモノだけでは足りなかったフィリピン諸島の多様かつ固有な諸文化圏の成り立ちを説明する現代の資料を4日間マニラで収集した。モノの細部が、フィリピンの文化圏は諸文化の混交からなり、混ざりながらも溶けることなく、混交する以前の固有性を持ち合わせているということをBに示した。Bが企画展の起案書に「ハロハロで Good!(グー!)] のタイトルを書いたのはモノの細部との対話による成果であった。モノの細部との対話は企画展図録にも楽しいイラスト入りで活かされた。図録にも企画展を楽しみ、フィリピンを好きになってもらおうというBの意図が現れている。写真やイラストが入っているからよいというわけではなく、読むためだけの図録というより、図録の写真や文章、イラストが読み手に話しかけてくるような対話型の仕上げになっている。「フィリピンを好きになって帰ってもらえれば」というBのアスピレーションが来館者を呼び込むことができたのは、博物館のスタッフやスタッフの家族であるフィリピン系の移民の尽力、在日フィリピン人コミュニティやフィリピン支援団体の協力、恩師からの教え、恩師から寄贈されたモノの細部、読み込まれた段ボール4箱分の資料、考古学の専門性という裏付け、これらのインテリジェス・ネットワークがあり、モノ（展示物）と人（来館者）をキュレイトするためのナラティ

ヴが学習される構造が出来ていた。語り／ナラティヴはモノ（コンテンツ）語りであり、語りの技術でもある。

語り／ナラティヴが学習される構造を組み立てた企画者は、企画展をやり遂げて、何を学んだのだろうか。本稿でいう学びは視座の変容である。語り／ナラティヴの学びとはどのような視座を持つ人に変えたのか。

「つなぐという役目はすごく必要だし、自分が勉強してきたことも自分で一応やんなきゃいけない。その代わりに、普段だったら、まあ、お客さんと研究者の方とかその間にいられるわけですけど、こういう自分にとっては初めての展示だと、いろいろ別になっていく。今回、お客さんと研究者じゃなくて、もっといろんな人たちの間にいるっていうのは、はじめて実感できたっていうんですかね。はじめてじゃないな、いつもよりは強く実感できたという意味ではおもしろかったですけど」（インタビュアーによるトランスクリプト：31）この「もっといろんな人たちの間にいる」感覚は、政治学者ハンナ・アーレントの思想において繰り返し論じられる in-between 人やモノとの間で複数の生 bios を生きる人間の条件に通底する。古い自己の殻が破られ、新たな誰かへと自己が更新されていく。更新とは学びである。モノの細部、資料、図録、スタッフ、外部協力者たち、恩師、来館者と語りを重ね、インタビューにおける語り／ナラティヴを通じて、記憶を掘り起こし、企画展の準備から開催、報告書作成に至るまでの時間を筆者に対して解放し、「もっといろんな人たちの間にいる」感覚を「いつもよりは強く実感できた」ことを眺める視座を持ち客観的におもしろがる人に変えたのである。

5. 結び

フランツ・ファノンによる「ネイションの文化について」に依拠して、ネイションのナラティヴについて論じたホミ・K・バーバは、ネイションという空間が、「国民という社会的想像物のナラティヴを構築する試みとしてのエクリチュールの諸伝統にある」（バーバ,2009:78）と述べた。バーバは、ポストコロニアル研究者としても、文化の異種混交性についての論客としても名をはせた。ポストコロニズムからも語られるフィリピンの文化が形成されていく様を「ハロハロ（混ぜ混ぜ）で Good!(グー!)」と表現し、つらい歴史の結果ではあるが、異種混交が魅力的であると思われたキュレーター B の語り／ナラティヴを専門業者とインタビュアーを務めた筆者とでトランスクリプションし、トランスクリプトにおけるノイズとボイスの混交を跡づけ、語り／ナラティヴの学びについて、キュレーター B は「in-between 人やモノとの間の複数の生 bios」の感覚を明確にした。筆者は、語り／ナラティヴの学びをナラティヴ・ラーニングという言葉で表現することも考えたが、学びのマニュアルのようにとらえられることをおそれ、語り／ナラティヴの学びと述べるにとどめた。学校教育のカリキュラム論や教師教育論に援用される社会構成主義心理学のナラティヴ・アプローチと異なることについてこれまでの章でもふれた。本稿で用いた方法は、ライフストーリー法であり、ポストコロニアル・スタディーズの異種混交性に関する知見や哲学者ジュリア・クリステヴァの生のナラティヴ論を応用した折衷主義的なものである。

本稿が示した語り／ナラティヴの学びについて知見を、ハンナ・アーレントが論じた「生 bios の複数性」に関する以下の知見につなげることができる。「我々の言葉で言えば、生物や事物やアイデアが複数存在する場合にはどこでも差異があり、この差異は外側から来るのではなく、二重性という形ですべての存在に本質的にそなわっているのであり、統一体としての一者もそこから来るのである」（アーレント, 佐藤訳, 1994:214）。二重性すなわち多様性と固有性を持つモノの細部が細部の情報を人に語り、その語りが記憶や資料からなる知識を介して語り直され、語り直す人の視座を変容させる学びが生まれ、人から人へと知識が語り継がれることにより、社会を規定する視座を変容させる知識ともなる。

よって、多文化と生涯学習、文化の異種混交性、ハンナ・アーレントの思想における生 bios の複数性及び思考、in-between から現れる不確かな多様性（ノイズ）である同時に確固たる固有性（ボイス）、語

り／ナラティブの学びが、本研究における知見として示された。

謝辞 本稿執筆において横浜ユーラシア文化館の博物館学芸員 B さんに、誠にお世話になりました。研究者として市民として、学芸員の B さん並びに横浜ユーラシア文化館企画展『フィリピンの文化と交易の時代——ハロハロで Good!(グー!)』に関与されたみなさま、文部科学省科学研究費助成研究(基盤研究(B):課題番号 21402032, 海外、平成 21-23 年度)「移民 1.5 世代の子ども達の適応過程に関する国際比較研究——フィリピン系移民の事例」の共同研究者たちに深く感謝申し上げます。

注

- 1) 高畑幸「在日フィリピン人の 1.5 世代——教育と労働が隣り合わせの若者たち」財団法人解放教育研究所編『解放教育』〈特集*外国人の生活と教育の今〉(2011)No.527(:54-63) 参照。高畑によれば、「1.5 世代」と呼ぶ場合の移住年齢に関する定義は研究者によりさまざまであると述べている。高畑は学習言語が固まる年齢を目安にした。しかし、言語教育学者 2 名への筆者による聞き取りにより、学習言語が固まる年齢には幅があり、年齢によって学習言語習得が固まるわけではないという学説もあることがわかった。よって、本稿では「10 年ひと昔」という故事に倣った。
- 2) フィリピン系移民の研究に開眼したのは、文部科学省科学研究費助成研究(基盤研究(B):課題番号 21402032、平成 21-23 年度)「移民 1.5 世代の子ども達の適応過程に関する国際比較研究——フィリピン系移民の事例」を企画した文化人類学者長坂格、共同研究者である関恒樹、鈴木伸江、社会学者である高畑幸、小ヶ谷千穂各氏の研究に触発されたからである。教育学者である筆者も職場の同僚小ヶ谷氏の厚意で共同研究の末席に加えられた。フィリピン系移民研究の蓄積がない筆者は焦るばかりで、教育学者として存分に貢献できなかったことはきわめて残念であったが、筆者の研究関心の在処を深く考え直す契機となった本件共同研究の意義は大きかった。長坂氏以下諸氏、そして、研究協力者となる以前から、筆者を在日フィリピン人コミュニティに参加させて下さった梅田氏、長年一度たりとも研究者の受け入れを認めなかった大規模なフィリピン系移民コミュニティの人たち、調査できなかったフィリピン系子ども移民たち、助言をしてくれた先輩友人研究者たち、筆者が出会わなかった在日の移民たちにも感謝する。
- 3) 筆者の研究成果のなかで、フィリピン系移民の研究は、「在日フィリピン系移民第 1.5 世代の子どもの発達と教育相談アーカイブス」(2011)『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学)』No.13(:207-216)のみあげられる。
- 4) 書き起こし専門業者に IC レコーダーを渡さず、カセットテープを渡したのは、インタビューの出だしはカセットテープから鮮明に聴き取れたこと、IC レコーダーには別件の記録も多数保存されていたことによる。
- 5) 自己や他者の生、文化の理解を目的とする手立てをライフストーリー法と考えてよいが、ライフストーリー法には聞き方の技術だけでなく社会科学や人文科学の領域横断的な見識や理論が必要とされ、誰にでもすぐ出来る簡単な研究方法ではない。ライフストーリー法に詳しい桜井厚によると「現在のトランスクリプトでは様変わりしている。インタビュアーの質問は語り手の語りとおなじ位置づけがなされており、インタビューで語られたトピックの継起順序にそってトランスクリプトも作成されている。じつは、この変化はライフヒストリーからライフストーリーへと方法論の鍵概念が変化したこととも対応している。ライフヒストリーは、調査の対象である語り手に照準し、語り手の語りを調査者がさまざまな補助データを補ったり、時系列的に順序を入れ替えるなどの編集を経て再構成される。それに対し、ライフストーリーは口述の語りそのものの記述を意味するだけでなく、調査者を調査の

重要な対象であると位置づけているところが特徴なのである。」(桜井,2005:8-9) 桜井厚によれば、ライフストーリー法は、エスノメソドロジー、社会構成主義、ナラティブ論など、語りを用いる他の方法論と理論的な峻別は完全にはなされていないといわれる。

参考文献

- 神野善治監修、神野善治、杉浦幸子、紫牟田伸子、仲野泰生、鈴木敏治著,(2008),『ミュージアムと生涯学習』武蔵野美術大学出版局.
- ケネス・J・ガーゲン(東村和子訳)(2004)『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版.〈Kenneth Gergen(1999) "An invitation to social construction" Sage Publications〉
- 『現代思想』(1997)〈特集*ハンナ・アーレント〉7月号第25巻第8号、青土社.
- 財団法人全日本社会教育連合会(2012)『社会教育』〈地域とともにある博物館〉第67巻9月号.
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚(2005)『境界文化のライフストーリー』せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子編(2005)『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
- ジュリア・クリステヴァ(松葉祥一、椎名亮輔、勝賀瀬恵子訳)(2006)『ハンナ・アーレント——〈生〉は一つのナラティブである』作品社、<Julia Kristeva," Le génie féminin -La vie, la folie, les mots. I Hannah Arendt" (1999) Gallimard>
- ディビッド・ジョエル・スタインバーグ(堀芳枝、石井正子、辰巳頼子訳)(2000)『フィリピンの歴史・文化・社会——単一にして多様な国家』明石書店.
- 二宮祐子(2010)「教育実践へのナラティブ・アプローチ:クランディニンらの『ナラティブ探究』を手がかりとして」『学校教育学研究論集』第22巻(:37-52)
- 日本社会学会(2009)『社会学評論』〈特集*「見る」ことと「聞く」ことと「調べる」こと〉Vol.60, No.1(:2-123)
- 野口裕二(2005)『ナラティブの臨床社会学』勁草書房.
- マーシャ・ロシター/M.キャロリン・クラーク(立田慶裕、岩崎久美子、金藤ふゆ子、佐藤智子、萩野亮吾訳)(2012)『成人のナラティブ学習——人生の可能性を開くアプローチ』福村出版, <Marsha Rossiter and M. Carolyn Clark.,(2010)," Narrative Perspectives on Adult Education: New Directions for Adult and Continuing Education., No.126" ,Originally Published by Wiley Periodicals, Inc., A Wiley Company. >
- ハンナ・アーレント(志水速男訳)(1994)『人間の条件』筑摩書房〈Hannah Arendt, (1958) "The Human Condition" ,University Chicago Press.〉
- ハンナ・アーレント(佐藤和夫訳)(1994)『精神の生活〈上〉』岩波書店.
- ホミ・K・バーバ(ダニエル・ガリモア、磯前順一訳)(2009)『ナラティブの権利——戸惑いの生へ向けて』みすず書房.
- 矢野智司、鳶野克己編(2003)『物語の臨界——「物語ることの」教育学』世織書房.
- 横浜ユーラシア文化館(2011)『フィリピンの文化と交易の時代—青柳洋治コレクションを中心に』
- 吉岡・シャーミン・ボランテ(2009)『日本語・英語・フィリピン語ポケット辞典』TLS出版社.